

## 解析学 演習問題 3 解答

### 問 1

まず,

$$\|f\|_\infty \geq \sup_{\substack{g \in L^1(X, \mu) \\ \|g\|_1 \leq 1}} \int_X |fg| d\mu$$

を示す.  $g \in L^1(X, \mu)$  で,  $\|g\|_1 \leq 1$  となるものが任意に与えられたとする. ヘルダーの不等式から,

$$\int_X |fg| d\mu \leq \|f\|_\infty \|g\|_1 \leq \|f\|_\infty$$

となるので, 示された. 次に,

$$\|f\|_\infty \leq \sup_{\substack{g \in L^1(X, \mu) \\ \|g\|_1 \leq 1}} \int_X |fg| d\mu$$

を示す. 最初に示した不等式から,  $\|f\|_\infty = 0$  の時は,

$$0 = \|f\|_\infty \geq \sup_{\substack{g \in L^1(X, \mu) \\ \|g\|_1 \leq 1}} \int_X |fg| d\mu$$

より,

$$\sup_{\substack{g \in L^1(X, \mu) \\ \|g\|_1 \leq 1}} \int_X |fg| d\mu = 0$$

だから,  $0 \leq 0$  となって成立する.  $\|f\|_\infty \neq 0$  とする. まず,  $X$  が  $\sigma$  有限であることから, 可測集合の上昇列  $\{X_n\}_{n=1}^\infty$  であって,  $\forall n \in \mathbb{N}, \mu(X_n) < \infty$  かつ  $\cup_{n=1}^\infty X_n = X$  となるものが存在する.  $0 < a < \|f\|_\infty$  が任意に与えられたとする. 任意の  $n \in \mathbb{N}$  に対し,

$$A_{n,a} := X_n \cap \{|f| > a\}$$

として定めると,  $\{X_n\}_{n=1}^\infty$  の取り方から,  $\{A_{n,a}\}_{n=1}^\infty$  は増大列であり, 任意の  $n \in \mathbb{N}$  に対して  $\mu(A_{n,a}) < \infty$  であり,

$$\cup_{n=1}^\infty A_{n,a} = \{|f| > a\} \cap (\cup_{n=1}^\infty X_n) = \{|f| > a\}$$

となる. すると,  $a < \|f\|_\infty$  だから  $\mu(\{|f| > a\}) > 0$  であり,

$$\forall n \in \mathbb{N}, \quad \frac{\mu(A_{n,a})}{\mu(\{|f| > a\})} \leq 1$$

が成り立つ。そこで

$$g_n(x) = \frac{\chi_{A_{n,a}}}{\mu(\{|f| > a\})}$$

として  $\{g_n\}_{n=1}^\infty$  を定めると,

$$\forall n \in \mathbb{N}, \quad \int_X |g_n(x)| d\mu = \frac{\mu(A_{n,a})}{\mu(\{|f| > a\})} \leq 1$$

より,  $g_n \in L^1(X, \mu)$  であり,  $\|g_n\|_1 \leq 1$  である。このとき,

$$\begin{aligned} \forall n \in \mathbb{N}, \quad \int_X |fg_n| d\mu &\geq \int_{A_{n,a}} |fg_n| d\mu \quad (A_{n,a} \subset X) \\ &\geq a \int_{A_{n,a}} |g_n| d\mu \quad (A_{n,a} = X_n \cap \{|f| > a\}) \\ &\geq a \frac{\mu(A_{n,a})}{\mu(\{|f| > a\})} \end{aligned}$$

となるから,  $\mu(A_{n,a}) \rightarrow \mu(\{|f| > a\}) (n \rightarrow \infty)$  より,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_X |fg_n| d\mu \geq a$$

である。  $0 < a < \|f\|_\infty$  は任意に与えられていたから,

$$\|f\|_\infty \leq \sup_{\substack{g \in L^1(X, \mu) \\ \|g\|_1 \leq 1}} \int_X |fg| d\mu$$

を得る ( $\|f\|_\infty = \infty$  のときは  $\infty = \infty$  の意味で成立する)。以上により示された。

## 問 2

ここでは  $f$  を実数値関数として証明する (そのような指示があった)。  $t \in I$  が任意に与えられたとする。  $0$  に収束する  $\mathbb{R} \setminus \{0\}$  の数列  $\{h_n\}_{n=1}^\infty$  が, 任意に与えられたとする。 仮定 (3) より, 開区間  $J$  と  $g_J \in L^1(X, \mu)$  で,  $t \in J \subset I$  かつ  $J \times X$  上で

$$\left| \frac{\partial f}{\partial t}(t, x) \right| \leq |g_J(x)|$$

が成立するものが存在する。  $\{h_n\}_{n=1}^\infty$  は  $0$  に収束するので,

$$\exists N \in \mathbb{N}, \quad n \geq N \Rightarrow t + h_n \in J$$

となる。 仮定 (2) から, 平均値の定理を用いて,

$$\forall n \geq N, \quad \exists \theta \in [0, 1], \quad \left| \frac{f(t + h_n, x) - f(t, x)}{h_n} \right| = \left| \frac{\partial f}{\partial t}(t + \theta h_n, x) \right|$$

である。ここで,  $\forall n \geq N, t + h_n \in J$  より,

$$\left| \frac{\partial f}{\partial t}(t + \theta h_n, x) \right| \leq |g_J(x)|$$

となる。いま,  $n \in \mathbb{N}$  に対して,

$$g_n^t(x) := \frac{f(t+h_n, x) - f(t, x)}{h_n}$$

とすると, 仮定 (1) から  $\{g_n^t\}_{n=1}^\infty$  は可積分関数列であり, 仮定 (2) より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} g_n^t(x) = \frac{\partial f}{\partial t}(t, x)$$

である。このとき,

$$\begin{aligned} \forall n \geq N, \quad \left| \frac{h(t+h_n) - h(t)}{h_n} \right| &= \left| \int_X g_n^t(x) d\mu \right| \\ &\leq \int_X |g_n^t(x)| d\mu \\ &\leq \int_X |g_J(x)| d\mu \end{aligned}$$

であり,  $g_J \in L^1(X, \mu)$  だから,  $\{g_n^t\}_{n=1}^\infty$  に優収束定理を用いて,

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{h(t+h_n) - h(t)}{h_n} &= \lim_{n \rightarrow \infty} \int_X g_n^t(x) d\mu \\ &= \int_X \lim_{n \rightarrow \infty} g_n^t(x) d\mu \\ &= \int_X \frac{\partial f}{\partial t}(t, x) d\mu \end{aligned}$$

を得る。したがって,  $h$  は  $t \in I$  において微分可能である。  $t$  は任意に与えられていたから,  $h$  は  $I$  上微分可能であり,

$$\forall t \in I, \quad h'(t) = \int_X \frac{\partial f}{\partial t}(t, x) d\mu$$

となる。

### 問 3

(1)

これは計算するだけだから, 省略。

(2)

$\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$  となる  $q$  を取る。まず,

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(t, x) = \int_{\mathbb{R}} \frac{\partial^2 \phi}{\partial x^2}(t, x-y) f(y) dy$$

を示す。各  $t$  に対して  $\phi(t, x)$  は  $x$  の関数として  $C^\infty$  であり, さらに

$$\frac{\partial^n \phi}{\partial x^n}(t, x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi t}} \frac{\partial^n}{\partial x^n} \left( e^{-\frac{x^2}{2t}} \right)$$

の右辺は  $x$  についての多項式と  $e^{-\frac{x^2}{2t}}$  の積のいくつかの和になるから、任意の  $n \in \mathbb{N}$  に対して  $\frac{\partial^n \phi}{\partial x^n}$  は  $x$  の関数として  $L^q(\mathbb{R})$  に属する。従って、命題 1.2.6 から、

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(t, x) = \int_{\mathbb{R}} \frac{\partial^2 \phi}{\partial x^2}(t, x - y) f(y) dy$$

が成立する。次に、

$$\frac{\partial u}{\partial t}(t, x) = \int_{\mathbb{R}} \frac{\partial \phi}{\partial t}(t, x - y) f(y) dy$$

を示す。  $x_0 \in \mathbb{R}$  が任意に与えられたとする。任意の  $t \in (0, \infty)$  に対し、  $t \in (a, b) \subset (0, \infty)$  となる开区間  $(a, b)$  を一つ取る。このとき、

$$\frac{\partial \phi}{\partial t}(t, x_0 - y) = \left( \frac{\pi}{(2\pi t)^{\frac{3}{2}}} + \frac{(x_0 - y)^2}{2t^2} \frac{1}{\sqrt{2\pi t}} \right) e^{-\frac{(x_0 - y)^2}{2t}}$$

だから、  $(a, b)$  上で

$$\left( \frac{\pi}{(2\pi t)^{\frac{3}{2}}} + \frac{(x_0 - y)^2}{2t^2} \frac{1}{\sqrt{2\pi t}} \right) e^{-\frac{(x_0 - y)^2}{2t}} f(y) \leq \left( \frac{\pi}{(2\pi a)^{\frac{3}{2}}} + \frac{(x_0 - y)^2}{2a^2} \frac{1}{\sqrt{2\pi a}} \right) e^{-\frac{(x_0 - y)^2}{2b}} f(y)$$

が成立する。ここで

$$\left( \frac{\pi}{(2\pi a)^{\frac{3}{2}}} + \frac{(x_0 - y)^2}{2a^2} \frac{1}{\sqrt{2\pi a}} \right) e^{-\frac{(x_0 - y)^2}{2b}}$$

は  $y$  の多項式と  $e^{-\frac{(x_0 - y)^2}{2b}}$  の積だから、  $y$  について  $L^q(\mathbb{R})$  に属する。  $f \in L^p(\mathbb{R})$  だから、ヘルダーの不等式を用いると、上の不等式の右辺は  $y$  について  $L^1(\mathbb{R})$  に属する。従って、  $\phi(t, x_0 - y) f(y)$  は前問の仮定 (3) を満たす。仮定 (1) を満たすことも同様にして分かる。(2) を満たすことは明らかだから、前問の結果を適用して

$$\frac{\partial u}{\partial t}(t, x) = \int_{\mathbb{R}} \frac{\partial \phi}{\partial t}(t, x - y) f(y) dy$$

を得る。以上の議論と (1) から、  $u(t, x)$  も熱方程式の解である。

(3)

$$\psi(x) := \frac{1}{\sqrt{\pi}} e^{-x^2}$$

とすると、  $\psi \in C^\infty(\mathbb{R})$  であり、さらに

$$\int_{\mathbb{R}} \psi(x) dx = 1$$

である。ここで  $\varepsilon = \sqrt{2t}$  とおくと、

$$\psi_\varepsilon(x) := \frac{1}{\varepsilon} \psi\left(\frac{x}{\varepsilon}\right) = \phi(t, x)$$

であり、  $t \rightarrow +0$  のとき  $\varepsilon \rightarrow 0$  である。すると定理 1.2.5 から

$$\lim_{t \rightarrow +0} \|u(t, \cdot) - f\|_p = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \|\psi_\varepsilon * f - f\|_p = 0$$

となる。